

iTesting チャンネルによる HIV 検査体制の構築と確立のための研究

研究分担者：吉田理加（愛知県立大学外国語学部）

研究要旨

本研究は様々な異なる形態の HIV 検査を実践するための基礎資料（マニュアル）を作成することを目的としている。研究分担者が属するアウトリーチンググループでは、外国人など多様な人々のコミュニティにアウトリーチをする方法を模索した。例えば、外国人コミュニティへのアウトリーチのために昨年に引き続き iTesting@Nagoya ウェブサイトと予約サイト、そして検査通知サイトを昨年に続き多言語化し、やさしい日本語を追加して合計 8 言語に対応するようにした。また言語別広報カード、検査会告知ポスター（多言語）、多言語広報のために開設した SNS の多言語での運用、HIV と iTesting 検査会の啓発動画多言語字幕版などの継続的なアウトリーチの方法を模索した。また、翻訳の正確性や適切さを判断するために ChatGPT などの大規模言語モデルを利用する方法を検証中である。

A. 研究目的

本研究は、現行の HIV 検査体制に加えて様々な HIV 検査を実践し、より受検者にとっても医療従事者にとっても受検/施行可能な検査の導入を進めるための基礎資料（マニュアル）を作成することを目的とする。その中で、外国人や学生、LGBTQ など多様なコミュニティへのアウトリーチのよりよい実践方法を考察する。

B. 研究方法

アウトリーチ活動として、iTesting@Nagoya の HIV 検査の重要性を説明した啓発資料の作成および設置、検査の広報（SNS での発信・動画配信・多言語対応）、検査を評価するためのアンケートの作成・解析、検査施行可能な場の模索、各コミュニティでの啓発活動、多言語対応した iTesting@Nagoya ウェブサイトの作成を行うこととしている。

本年度は、昨年度に引き続き、iTesting@Nagoya ウェブサイトと予約サイトの多言語化を行い、日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、中国語、インドネシア語に加えてやさしい日本語を作成した。さらに、多言語広報カード、HIV と iTesting@Nagoya に関する啓発動画（多言語字幕付き）に加えて、検査会ごとの多言語ポスターや啓発動画を紹介する多言語ポスターを作成し、配布した。さらには、試験会場で多言語表示を実施した。

多言語化するために翻訳言語を増やすと、各言語の翻訳内容が正確で、適切であるかを確認し、把握することが難しくなる。そこで、ChatGPT などの大規模言語モデルを使用して、

複数の翻訳候補文の文法的正確性、流暢性、そして、HIV 検査会という文脈に適切な訳文となっているかを検証する方法を考察した。

（倫理面への配慮）

検査は、予約からすべて匿名検査で行っている。またアンケート調査も匿名で行い、名古屋市立大学の倫理審査を受審の上実施している。

C. 研究結果

昨年度に引き続き、多言語ウェブサイトで検査の重要性を説明した多言語スライドの作成を継続できた。また、啓発動画にアクセスを促すためのポスターや多言語チラシも作成し、SNS を活用した多言語アウトリーチ活動も、ゲイコミュニティへの性感染症啓発団体と連携し実施した。多言語翻訳多言語サイトから毎回の検査会において一定の数の予約がなされたことをみて、ある程度のアウトリーチの目的は達成されたと考えられる。同様に、ChatGPT などの大規模言語モデルを用いて、翻訳の正確性や適切性を検証する方法については、まだ分析中であるが、ある程度参考になることがわかった。

D. 考察

性感染症検査会のアウトリーチは、多言語コミュニティによっては偏見が根強く、日本語コミュニティも含んだ多言語コミュニティへのアウトリーチであることを明確に打ち出すことが必要である。さもなければ、特定の言語のコミュニティが、社会の中で、性感染症などの病気をもたらす存在としてみなされているのではないかと捉えられてしまう危険があり、アウトリーチ活動においては、日本語を含む多言語アプローチが有効であることもわかった。

今年度から導入した「やさしい日本語」は、希少言語話者で該当言語の翻訳は提供できなくても、日本に暮らす人々であれば「やさしい日本語」は理解している可能性が高く、アウトリーチできる対象が飛躍的に伸びる効果があると考ええる。しかし、病名などの専門用語を「やさしい日本語」にすることは難しく、英語訳に頼らなければならない場合もあり、限界があることも分かった。

E. 結論

HIV の正しい情報を多言語コミュニティに広く啓発することは健康の維持・向上という社会的意義がある。さらには、アウトリーチングの手法を理論・実践的に構築することには学術的・国際的意義がある。上述の通り、ある程度の多言語ならびに多様な層へのアウトリーチは一定程度達成されたと思われるため、そのノウハウを継承するために情報をホームページにまとめている。具体的には、検査の多言語化を行うための方法として、翻訳のコツ、広報の仕方、やさしい日本語のコツを説明し、多言語化した素材をそろえて公開する準備をしている。

F. 研究発表

学会発表

国内

1. 吉田理加・糸魚川美樹 (2024. 9. 7) 「大学院コミュニティ通訳学コースの取り組み：「顕在的機能」と「潜在的機能」からの考察」日本通訳翻訳学会 第25回年次大会 (神戸大学)
2. 道上史絵・村上智里・吉田理加 (2024. 9. 7) 「日本の捜査通訳制度の問題に関するケーススタディ：フィリピン (タガログ) 語誤訳事件を事例として」日本通訳翻訳学会 第 25 回年次大会 (神戸大学)
3. 吉田理加 (2024. 12. 12) 「司法通訳における通訳人の中立性と倫理規定」愛知県立大学・RMIT 大学連携国際シンポジウム 社会インフラとしての コミュニティ通訳制度構築検討に向けて：大学と自治体の国際連携 (愛知県立大学)

国外

1. Yoshida, R. (2024.11.23) Constructing 'Trust' in Legal and Medical Interpreting in Australia and Japan: A Narrative Analysis. 37th AUSIT National Conference (RMIT University)
2. Yoshida, R. (2025.02.13). Dilemas y encantos de traducir e interpretar entre español y japonés (日西通訳翻訳のジレンマと魅力) バルセロナ自治大学翻訳通訳

学部招待講演 (バルセロナ自治大学)

G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他